



いれずみ物語

—17—

小野友道

顔のいれずみ

日本のいれずみは「本来かくされ、覆われていなければならない」「それは閉ざされた美である。暗黒ゆえに極彩の美である」と松田修が言う。今日でも顔にいれずみは、まず見ない。一方、例えば Gröning の “Decorated Skin A World Survey of Body Art” を眺めてみると、世界は広い。古今東西、多くの人類が、いかにその顔を飾ることに懸命であることか。ボディペインティングあるいは瘢痕によるものもあるが、狭義のいれずみもさまざまある。

Captain Cook の航海に随行した Sydney Parkinson が描いた顔一面の芸術的ないれずみは象徴的である。マオリ族では酋長が顔全体に渦巻状の模様のいれずみを入れるが、それは権威を表している。また、アフリカの瘢痕いれずみによる顔面の無数の線条は、戦闘の折、同士打ちを避けるためでもあった。部族の証印なのである。また台湾原住民族タイヤル人において、顔にいれずみがあってはじめてタイヤルの人間と認められ、本当の男、本当の女と呼ばれるという。そういえば、かつてアイヌ女性の口の周りにもいれずみがあったが、アイヌ以外の日本ではどうだったのか。顔のいれずみは刑罰以外にはなかったのだろうか。

*

さて、顔のいれずみの前に、そもそも顔とは

何かを考えねばなるまい。私は医学生への講義の冒頭に、しばしば「顔とはどの部分か」と問う。多くは髪の毛の生え際から下と答える。「それでは禿げてくると顔は広がるのか。そう世間でくあの人は顔が広い」というのは、そうなのか」と私はとぼける。解剖学的には顔は眉の上縁から下方を指す。額は脳頭蓋の前部を覆っている皮膚で形成されているので、額は顔に含まない。そういう訳で、被髪頭部 scalp, 額 forehead, そして顔 face とに区分される。しかし、一般的には額を含めて顔と呼ぶ。

もっと広い顔もある。「わが国の乞食が真冬にもシャツ一枚でいるのに、耳まで貂の毛皮にくるまっている人と同じように元気なのを見て、誰か或る人が、乞食の一人に、どうしてそんな我慢ができるのかとたずねたところ、乞食は答えた。旦那さまだって、顔はむきだしだ、私は全身が顔なのだ」と。(モンテーニュー『エッセー』、鷲田清一『顔の現象学』より)

*

解剖学的な顔さえ複雑だが、顔の意はまだまだ広く深い。曰く「顔を立てる」「顔が見えない」などなどある。加えて顔面という語もある。白川 静によるとく顔は国語では「かお」であるが、『説文』には「眉目の間なり」としているように、それは「ひたい」をいう。「ひ



マリオ族酋長の顔一面のいれずみ シドニー・パーキンソン画
 (『Decorated Skin A World Survey of Body Art』より転載)

たい」を中心として、その部分を顔面という。面も本来は顔を覆うもので、眼だけをあらわしている形である。それで顔面とは、ひたいと眉目の間をいう語>となる。ますます複雑である。さらに白川は、そもそも顔の文字そのものがいれずみと切り離せないというのである。「文」の文字が「顔」に見られるが、文には「いれずみをする」の意もあり(『大漢和辞典』)、「厂」がひたいの側面形を示すとし、「彦とは、ひたいに文身の美しい文様を加えたもので、『説文』にはく美士の文あるもの」という。立派な男というほどの語である」という。

加えて「産」もまた文に従うとし、それは「アヤッコ」の風習に残っている。これはお宮参りの赤ちゃんの額に墨か紅で×を描くもので、丈夫に育つようにとの魔よけのまじない印である。×は犬の字を意味し、『菟玖波集』に「犬こそ人の守りなりけれ、みどり子の額にかける文字をみよ 良阿法師」とある。これは中国でもあった習俗で、『守貞謾稿』にも「額

に犬字書くこと、漢土にも似たることあり」とある。一方『日本民族語大辞典』には、×はもともと草の葉を結んだ形としている。いずれにせよ、アヤッコも広い意味のいれずみではないか。インドの女性の額にあるティラクあるいはビンディと呼ばれる赤い印にも通じる。いずれも通過儀礼の意があり、魔よけである。

さて、顔のいれずみはわが国では刑罰として知られているが、これについては稿を改めるとして、『古事記』に伊須気余理比売を神武天皇が娶る話にいれずみが出てくる。ここでは尾崎左永子の訳に従う。「伊須気余理比売を交えた七人の乙女たちが、高佐士野に野遊びに行くことを知って、大久米の命は、天皇を案内、…天皇は一番前を歩いている伊須気余理比売が目についたので、年長の娘をもらおうかと答えた。そこで大久米の命は天皇の仰せを伝えに行った。伊須気余理比売は大久米の命の眼を見ると、驚いたように、あめ 鶴鶴 千鳥 真鴉 など 黥ける利目」と歌った。大久米の命が、眼の

まわりに鋭い形の入墨をしていたからである。…<雨鳥 せきれい 千鳥に頬白 まるで小鳥みために なんて目に入墨なんかしていらっしやるの> 大久米の命はまじめくさって、媛子に 直に逢はむと 我が裂ける利目 <美しい乙女に ぜひ直接お目にかかりたいと こうして目を裂くようにして見開いているんです>と答えた」

昔の中国に次のような逸話がある。深陽の史灘の娘の史女は両親の決めた男と婚約、その男が婿入りする直前に病没してしまった。史女は嘆き悲しんだ。喪も明けたので、娘の悲嘆をなくそうと新しい婿をとらそうとしたが、史女は思いつめて一生独身で過ごしたいと願ったが、父親が承知しない。そこで史女は顔に「中心不改」と4文字を黥したので、父親も近隣の者も彼女の意志の固いのを知り、その後は婿取りを進めなくなったという、すごい決意の顔のいれずみである。

*

さて顔のいれずみで忘れてならないのが『魏志倭人伝』である。ご存じのように、たった漢字2,000字からなる。その中に「男子無大小皆黥面文身…」という箇所があり、小南一郎の訳に「倭人たちは男子は、誰もかれもが、顔や身体に入れ墨をしている。昔から、倭の使者が中国にやってくる時には、みな自分のことを大夫と称している。夏王朝の主君であった少康の息子は、会稽に封ぜられると、髪を切り身体に入れ墨をして、蛟や龍の害を避けた。いま倭の水人たちは盛んに水に潜って魚や蛤を捕っているが、身体に入れ墨をするのは同様に大きな魚や水禽を追いはらうためであって、それが後にだんだんと飾りになったのである。国ごとに入れ墨がそれぞれ異なり、あるいは左がわ、あるいは右がわ、あるいは大きく、あるいは小さくて、尊卑による区別がある」とある。

弥生後期3世紀には、すでに中国ではいれずみは刑罰の一種だったので、『三国志』の編者である陳寿に倭人のいれずみは驚きであった。日本では縄文中期以降の土偶の顔にいれずみらしき線がみられ、1世紀（弥生後期前半）とされる福岡県前原市の上籬子遺跡から、顔にいれ

ずみをした人物線刻板が発見されている。3、4世紀になると、土器、土製品、石棺の蓋などにある顔にいれずみらしい線がある黥面が多く発見されている。弥生時代に男子に見られるこれらのいれずみは、種族の認識票、通過儀礼であり、また戦士の印などの説がある。設楽博己は「縄文時代中ごろから終わりにかけて連続と連続する目の周りを取り囲む入れ墨が変化した形で前三世紀（弥生I期）に採り入れられ、これが三世紀の黥面につらなり、五、六世紀の埴輪の入れ墨に受け継がれる」とした。それは『記紀』にあるいれずみの話とつながる。

*

その後、顔のいれずみ、いやその他のいれずみも、やがてアイヌそして南島を除いて忽然と歴史から一旦消えることになる。下って江戸時代に刑罰として顔面にいれずみが登場する。現在まれに眉にいれずみを入れているのを見かけることはあるが、その他の顔のいれずみは、まずお目にかかれない。いやサッカーなどのサポーターの、その顔の線状のいれずみ、国旗のシールなどは、いれずみとはいえないか。さらに広げて、化粧そのものさえ顔のいれずみとは言えないか。かつての鉄漿はどうなのだろうか。

鷲田清一は「顔とは<呼びかけ>、あるいはささやかなく訴え>であり、見られるものではなく与えるもの」、さらに「肉体を己に従える主体的なもの座、すなわち人格の座」と言う。さすれば人は顔を気にせずにはいられない。歌舞伎、京劇のあの化粧はわれわれの意識を、代わって主張してくれるいれずみにちがいない。

(熊本保健科学大学・学長)

主要文献

- 尾崎左永子：『神と歌の物語 新訳 古事記』草思社、2005。
- 香原志勢：『顔と表情の人間学』平凡社、2000。
- 国分直一：『倭と倭人の世界』毎日新聞社、1975。
- 佐原 真：『魏志倭人伝の考古学』岩波書店、2003。
- 設楽博己：『三国志がみた倭人たち—魏志倭人伝の考古学』山川出版社、2001。
- 白川 静：『古代中国の文化』講談社、1979。
- 毎日新聞、「顔に入れ墨した人物線刻板発見」2月29日、1996。
- 松田 修：『刺青・性・死—逆行の日本美—』平凡社、1972。
- 山本芳美：『イレズミの世界』河出書房新社、2005。
- 鷲田清一：『顔の現象学』講談社、1998。
- 鷲田清一：『悲鳴をあげる身体』PHP研究所、1998。